



Title	いわゆる「主節現象」(MCP)について：心的態度の表現としての「ルート変形」(RT)
Author(s)	葛西, 清蔵
Citation	北海道大學文學部紀要, 44(1), 19-35
Issue Date	1995-08-31
Doc URL	http://hdl.handle.net/2115/33653
Type	bulletin (article)
File Information	44(1)_PL19-35.pdf



[Instructions for use](#)

いわゆる「主節現象」(MCP) について*

～心的態度の表現としての「ルート変形」(RT) ～

葛 西 清 蔵

0. Emonds (1970) は, Ross (1967) とともに, 英語がいかにつよく語順に依存する言語であるかを示している点でも重要な論文である。語順の著しい移動は, 主節に一度しかおこることができない⁽¹⁾, とする Emonds の主張は, さまざまな議論をよびおこした。小稿はそれらの議論について個々に論じようとするものではない。統語現象とみられていたこの移動現象は, 結局は, 発話者がその発話において, 何を聞き手に伝えようとしているのかという点, つまり, 話し手の意図・気持ちはどこにむけられているのか, という点から論じられるべきであることをのべようとするものである。

いわゆる, 主節におこる要素の移動, つまり「主節現象」(main clause phenomena: MCP) は, それが主節ばかりではなく, 従属節にもおこりうるが, 1. では, 主節の動詞がどんなものである時に, 従属節に「ルート変形」(以下 RT) がおこるか, という主節の動詞の側からの議論と, 従属節におこる移動現象がどんなものであるか, という移動現象に注目する二つの議論があるが, それぞれ反例があり不十分であることをのべる。2. では, 「主節現象」の問題を, 主節の動詞, 従属節におこる移動現象とべつべつに扱うこと自体に問題があり, これは主節移動現象をふくめた全体として考えなければならない, 文全体のどこに情報の豊かな部分があるかにかかわる問題であることをみる。3. では, RT が非制限的な従属節によくみられること, 結局 RT は主節, 従属節にかぎらず, 話し手がいちばん伝えたい部分におこることを見る。4. では, この現象は葛西 (1981, 1992 b, 1994 など) で主張された,

話し手の「心的態度」の一貫性と関連する問題としても考えるものであることをのべ、まとめとする。

1. Hooper/Thompson (1973) は、RT を疑問などのような文法機能をもつものと、否定要素の前置のように、なんらかの強調をくわえるものを区別し、RT のおこりうる時の動詞の分類をする。その結果、「RT は前提されている節には適用できないで、主張されている節のみに作用する」(1973: 162) とする。あとで見るように、このこと自体には間違いはない。しかし、その結論をみちびきだした過程には、いくつかの疑問点がある。動詞をわけた際、議論を that 節のみにかぎっていること、あげられている例文 255 のうち、可否の判断について、? のついているものが 2 例であることから、生え抜きの例によって、議論をしやすくしたのではないか、という疑問。とくに、典型的に RT がおこる class B の例文についても、I suppose, I guess, I imagine, I expect など、一人称・現在という形のみであること、など資料そのものが、かたよりをもっているものであることである。もともと、I guess, I imagine, I expect などは、典型的な「法表現」(中右 1979, 1980) であり、主張になりえない。したがって、従属節が主節のようになり、RT を許すことになる⁽²⁾。つまり、Hooper/Thompson の「主張部分に RT がおこる」とする結論はすでに、その道具立ての中にあることになる。これは、一定の結論が導きだされるような資料だけで議論し、せまい前提からの結果を一般化することになり、大きな問題である。これをつぎの例を検討しながらみていくことにする。(以下の例文はすべて、引用文献からのものである。)

- 1. a I realize that never before have prices been so high.
- b It seems that never before have prices been so high.
- b' I guess that never before have prices been so high. (Ogle:1981)
- (c??I guess that never before have prices been so high.) (Green:1974)

否定辞前置され、否定の意味がつよめられた、Never before have prices

been so high. をもっとも典型的な法表現である I realize, I guess, it seems につないでみると, 1. ではふるまいが共通で, I guess などは never 以下にたいする話し手の気持ちのもちかたをあらわす法表現でしかないことがよくわかる。(なお, まったくおなじ文について, 1.b', c でみるように判断が違いすぎるのも注目しておきたい。)

- 2.a ?It seems that not a bite has she eaten.
- b? *I realize that not a bite did she eat.
- c *I guess that not a bite has she eaten.

ところが, 2. では, 2.a, b, c でまったく判断がちがうのはどうわけであろうか。1. で共通のふるまいをしたものが, 2. では, それぞれ別のふるまいをはじめ。統語的な方法による Emonds にたいして, Hooper/Thompson は「一般的な方法で, 統語的な観点からの RT の範囲を定義しようとするのは, 可能とは思われない」(1973: 162) とし, Emonds の主張を「まったく正確だとはいいきれない」(not entirely correct) (1973: 112) というのは, それなりに正しいとしても問題が多い。このことは, Hooper (1975) にも同じようにみられる。2.a, b, c のようにちがったふるまいをする, 典型的な法表現である it seems, I realize, I guess においてすら, これだけの判断の違いがあるものを一つのグループいれてしまって議論をすること自体も問題であろう。

さて, つぎにこのことに関連して, 以下のように整理して it seems に限ってみてみたい。

- 3.a It seems that this meeting will never end, will it?
- b It seems that never before have prices been so high.
- c ?It seems that not a bite has she eaten.
- d It seems that on the opposite corner stood a large Victorian

mansion.

e *It seems that into the garden ran the rat with red color.

ここで注目されるべきは、Hooper/Thompson (1973), Hooper (1975) で RT がおこるとされる it seems あとにおこる移動についてである。付加疑問がおこることは問題ないとして、否定要素の前置でも、3.b, c では判断に差があり、また場所・方向副詞でも判断に差がある。一見、主節の問題ではなくて移動の種類の問題のようでもあるが、実はそうではない。許容されない 3.e に関連して 4. の例をみよう。

4. a It seem that into the garden ran a golden-haired girl.

b ?It seems that into the garden ran a yellow cat.

c ??It seems that into the garden ran the golden-haired girl.

d *It seems that into the garden ran one.

ここでは、主節動詞、移動の種類までおなじである。ところが許容度がそれぞれちがう。このことから、まず、つぎのようにいうことができよう。

5. MCP の問題は、主節の動詞だけの問題でも、移動の種類だけの問題でもない。

4. a では、a golden-haired girl は情報ゆたかで、かつ不定 (indefinite) である。4. c は the で定的 (definite) であるところが 4. a とちがう。4. d では、one で意味情報量は少ない。文尾は、本来、聞き手に一番伝えたいことが新しい情報としてくるところであるから、4. a, b, c, d の順に許容度がおちる。このことは、Ogle (1981) の例でも確かめることができる。Ogle は、Emonds の RT を検討しなおし、「真の RT」(true RT) と、のこりの RT (remaining RT) を区別した。そして、Emonds の統語的な方法を一定の評価をし、Emonds の方法をすてきるのは「時期尚早」(premature) (1981 : 120) とし

た。そして、つぎの例をあげながら、「真の RT」として扱えないものは、語用論的な理由で説明できるとした。

6. a I suppose the remaining strawberries John ate.
 b *I was surprised that the remaining strawberries John ate.
 c ?I was surprised that the remaining strawberries John ate at breakfast.
7. a ?I was surprised/deny that the remaining strawberries John ATE.
 b I was surprised/deny that the remaining strawberries John THREW IN THE GARBAGE.

I suppose は、I think などと同じように、典型的な法表現であり、従属節が主張となり、この部分に RT がおこる。6. b, c, 7. a, b では、主節が、I was surprised で、その従属節には RT がおこりえないはずである。Ogle によれば、6. b は「変則」(anomaly) 的である。that 節のなかで、remaining strawberries が旧情報、John ate が新情報であるが、I was surprised がつくと、この部分が新情報になる。したがって、John ate は同時に旧情報でもあり、新情報にもなるため「変則的」だという (1981 : 127)。I was surprised がつくと that 節以下が前提、主節が主張となり、従属節には要素の移動はおこらない。ところが、6. b で許されないものでも、6. c のように at breakfast という修飾語をつけたり、7. b のようにストレスをかけると「ぎりぎり許容されるよう」(marginal) になる (cf. Erteschick-Shir 1989 : 674)。これらはいずれも、その箇所の情報量をふやすことになる。7. c のように「予測しがたいいまわし」(less predictable collocation) (1981 : 129) では、情報量はさらに多くなり、もともと主張であるべき I was surprised の部分が、相対的に「非焦点化」(defocus) され、本来前提であって、要素の移動が起こり得ない従属節に RT が許されることになる。(ここには、もう一つの要因もからんでいるようであるが、これについては後でふれる。) このように、RT は、主節の

動詞、従属節の要素の移動のみの問題として、切り離してみたり、主節、従属節をふくめた文全体としてみてみないかぎり、この現象の本質はつかみきれない。Hooper/Thompsonのような問題ぶくみの議論によらないでも、より一般的な方法でつぎの結論を導きだすことができる。

8. MCP は、主節の動詞の問題でも、移動の種類の問題でもない。その文全体のどの部分が情報ゆたかな主張となっているか、による。

2. 8 でみたことを確認するために、これに関連してつぎの例をみよう。

9. a A man who was wearing very funny clothes came in, * wasn't he/
didn't he?
b A man just came in who was wearing very funny clothes, wasn't
he/* didn't he?

およそ、付加疑問は、その文の主張部分にかかるものであるが、9. a, b にかかる付加疑問でわかるように、それぞれ、付加疑問がおもむくところがちがう。9. a では、a man came in にかかり、9. b では、後に移動された who was wearing very funny clothes にかかっている。与えられた文のどこが主張されている部分であるかは、文法的に主節であるか、従属節であるかは問題ではないのである。これについて、when, because をもつ従属節についてみることにしよう。

10. a *The villages all burst into song when in came the bride and
groom.
b *We were all much happier when upstairs lived the Brown.
c *I never enter into the room when squatting in the corner is a
spotted tree frog.
d He was washing the dishes, when in came the dog.

10. a, b, c がいずれも非文である。when は従属接続詞で、この節は名実ともに主節に従属しており、主張とはならない。一方、10. d では、(when の前に comma があることでもわかるとうり,) when 節はもはや非制限的な従属節ではなく、when=and then ほどの意味の coordinator になっている。when 以下は、新しい情報をつたえる主張の部分となっており、ここに RT がおこっている。このことは、because 節でもおなじことである。

11. a *We'll have to leave because not a bite has he eaten.
b You came in here because you like me, don't you?
c Robert was quite nervous, because never before had he had to borrow money.
d They had to hurry, because boy, were they late.

because にも、when と同様制限的な用法と、非制限的な用法があるが、非文の場合は制限的な because 節に RT がおこっているからだということになる。非制限的で文尾に来る because 節はもともとあたらしい情報をになうことを主たる機能としており、一般に新情報のくる位置である文尾にくる。この because は、and it is because ほどの意味であると考えられる。ここでは、11. b のように、付加疑問、11. c のように RT が生じること、11. d のように、boy のような間投詞が起こることもできる。(一般に、間投詞のある部分は新情報となり、主張となる (James : 1972) ことも注目しておく。) このほか、疑問の対象、否定の対象、12. のように分裂文の焦点になることでもわかる。これらになれるのは、主張部分、焦点だからである。

12. It is because/* since they are always helpful that he likes them.

これは、when, because 以外の従属接続詞の場合にもみられる。

13. a *Mildred loves her husband (even) though seldom does he bring

her flowers.

- b He has written a good thesis, (al)though to have sent a whole chapter on preposition Hopping was probably a mistake.

この *though* も等位接続詞のように用いられるときには、許容される文となる。このように、従属節でも RT を許す例は、むしろ機能的には、等位節と考えられる事実上の「ルート S」となり、MCP がおこりうる 14 の例と直線的につながることは明白である。「MCP は、主節の動詞の問題でも、移動の種類の問題でも、移動が主節におこるか、従属節におこるかの問題でもない」ことが確認される。

14.a I've been out of work, but never have I had to borrow money.

b He was washing dishes, and (right then) in came the dog.

3. 上でみたように、要素を移動することは、話し手の意図をつたえる主張部分におこるものである。このことをつぎの例により、上とは別の側面からみることにする。

15.a Who did you *see* a picture of ...?

b *Who did you *glimpse* a picture of ...?

c *Who did you *destroy* a picture of...?

15.a の文によって、話し手の意図は、*who* にたいする回答を知ろうとすることであることがわかる。ところが、15.b, c ではその意図がはっきりしなくなる。次の文と比較してみよう。

16.a Who did you see *a* picture of ...? (=10.a)

b ?/* Who did you see *that* picture of ...?

c *Who did you see *John's* picture of ...?

15, 16の文において, 15.aの see a picture の場合に許容されるのに, glimpse で許容されなくなるのは, see にくらべて glimpse では情報量がおおきくなるし (Erteschik-Shir 1987: 675, Erteschik-Shir/Lappin 1979: 62), 15.c では, destroy a picture という「予測しがたいいいまわし」が, 情報をふやしている (Deane 1988: 102)。これは, まさしく, Ogle が, 6.c, 7.a.b においていったことである。このことは, 16. についても事情はまったくおなじである。つまり, 16.a の a picture にたいし, 16.b, 16.c では, that, John's と次第に特定のになり, 意味的に優位 (dominant) になっていく。それぞれの文には, 主張になる部分があるはずであるが, これに衝突するような特定の, 意味的に優位な箇所があってはならない (葛西 1992 a) ののである。15.b, c, 16.b, c が許容されないのは, who のほかに, see より意味的に優位な glimpse, destroy また a より特定の that, John's があり, これらが衝突するからだと思われる。15, 16 にみられることは極めて一般的なことであって, 多くの例で確かめることができる。

これは, 「一つの文では, 一つの視点から, 一つのことが述べられていなくてはならない」(Banfield, (1973), cf. Bolinger (1979)) ということでもある。話すとき, 話し手の意図は明解でなくてはならないのである (cf. Grice 1975)。話し手の意図が明解でないのは, 話し手が話すときの意図, 話し手の気持ちの持ちかた, 「心的態度」がはっきりしていないことである。葛西(1981, 1992 b, 1994)では, 要素の移動が話し手の心的態度の表れであることを主張したが, それを 17. のように言い表わした。

17.a 要素の移動も法表現 (心的態度の表現) である。(葛西 1992 b)

- b 話し手の心的態度は一貫していなくてはならない。すでに明白な態度を表明した部分に, あらたに別の態度を表明することはできない。(葛西 1992 b, 1994)

17.a の証明は葛西 (1992 b, 1994) にゆずる (このあとの, 22.b の説明などにもその一部はみられる) が, 文のなかの要素の移動は, すぐれて話し手

の心的態度の問題である。

- 18.a * Who into the house dashed? (方向副詞前置/*wh*-前置)
b * Speaking to now the president is our top reporter. (話題化/小辞
(particle) 前置)
c * John, away he ran. (方向副詞前置/左方転位)
d * She never bought a car, and buy one never will she. (否定要素
前置/動詞句前置)

Emonds (1970)

18. の各文では、() で示された二種類の要素の移動がおこっている。これにより、Emonds は、「前置ルート変形」(preposing root transformation) を二度すると非文をつくるという。一つの移動により、一度心的態度が表明された部分に、さらに、移動をおこして、あらたな心的態度を表明しており、心的態度に一貫性がないということになる。

- 19.a John told me who Mary gave the iguana to.... (疑問)
b * Who did John tell you who Mary gave....to.... (二つの疑問)
- 20.a About the secret, John believes that Mary talked to Sue.... (話題化)
b * Who, about the secret, does John believe that Mary talked to.... (疑問と話題化)

中島 (1984)

中島は、このようなさまざまな二つの移動が両立しないことを「規則非両立現象」(RI: rule incompatibility)として提案した。また、Bolinger(1978: 122), Ogle (1981: 121) にも同じ趣旨の指摘がある⁽³⁾。Emonds (1970), 中島 (1984) などが、主節に移動が二度おこらないというのは、まさしく一つ

の箇所に移動による二つのことになった心的態度を表明したために、非文をつくることをのべていることになる。

21. 要素の移動がおこるのは、(すでに、要素の移動などにより話し手の心的態度が表明された部分ではなく) これから新しい情報として聞き手に伝えようとする部分、つまり、主張しようとする部分におこるはずである⁽⁴⁾。

Hooper などが、RT は主節の動詞が「主張」の動詞のときにおこる、としたのは基本的に間違いではない。間違いは、RT の問題を主節の動詞のなかにとじこめてしまったことである。

最後に、次の三つの例をみて、上で見たことを確認しつつ、まとめることにする。

まず、一つめ。

22. a *It's likely that seldom did he drive that car.
b I swear/* It's likely that never in my life have I borrowed money.
c Alice vowed that under no circumstances would she loan the key.
23. a *I was surprised that the remaining strawberries John ate. (=6. b)
b ?I was surprised that the remaining strawberries John ate at breakfast. (=6.c)
c ?I was surprised/deny that the remaining strawberries John ATE. (=7.a)
d I was surprised/deny that the remaining strawberries John THREW IN THE GARBAGE. (=7.b)

22.a で, seldom 以下では, that 以下にたいして「100 パーセント支持」(endorsement) を示しておきながら, 主文では, 「熱のない」(lukewarm) コミットしか示されていない (N. A. McCawley 1977 : 392) ために非文となっており, 一つの命題にたいする話し手の心的態度が一貫しない。また, 22.b の非文についても全く同じことが言える。I swear で非文をつくらないのは, never 以下で, 話し手は命題内容につよくコミットしているが, 主文の swear は, まさしくそれにふさわしい表現であり, 文全体として, 話し手の態度は一貫している⁶⁾。22.c についても同じであり, 23. についても同様である。23.d の the remaining strawberries John THREW IN THE GARBAGE という「予測しがたい」(unpredictable) (Ogle 1981 : 129) つながり はまさに, 主節 I was surprised と心的態度が一致し, つながり が自然である。

つぎに, 二つめ。

24. Mary hoped to win the medal, but I * rejected/??heard/?accepted/
accepted the claim that win it she would.

25. John says that standing in the corner is a man with a camera, and
I think he's right/?mistaken/* wrong.

Green は, Hooper/Thompson の主張を「うまくいかない」(not workable) (1976 : 391) とし, 24, 25 により「同意」(agreement), 「支持」(support) のときのみ RT は許容されるという。しかし, これは当然である。従属節で要素の移動などによって, 強めるなどその節の内容にコミットしておきながら, その同じ内容を, 主節で否定することはありえない。これは, まさしく, 話し手の心的態度の一貫性の欠如である。Bolinger (1977 : 519) が Green の主張を「原則的には正しい」(in principle correct) とするのは, このためであろう。

つぎに, 三つめ。

26.a *In came Jerry, because there are his shoes over there.

b *Sitting in the corner was Tom, because I just talked to his wife.

26.a, b の because は、上でみてきたように、新情報をつたえる主張部分となっている。ところが、前半では、要素の移動があり、ここでも新しい態度表明がある。それぞれ二つの主張部分があり、それが衝突して、結局、どちらを聞き手に伝えたいのかわからない文となっている。これが、26. を非文にしている理由であろう。

どの発話においても、話し手の発話意図があるはずであり、それが、主節であれ、従属節であれ、そこに話し手の気持ちの持ち方・心的態度が表明されているはずである。その心的態度のおもむくところが、話し手が伝えたい主張部分であるはずである。それ以外の部分は、(その話し手の心的態度が一貫しているかぎり) その話し手の主張に反するものであるはずがない。Hooper たちが、主節が主張の動詞の場合、また Green が、主節の動詞が「同意」・「支持」を表わす動詞の場合従属節に RT がおこるとしたのもまた、そのかぎりでは間違いではない。すでにみたように、それらは一つの傾向をのべているにすぎない。問題は、主節、従属節をふくんだ文全体にかかわるのであるのに、Hooper, Green とともに、これをすべて主節の動詞の問題にとじこめたことにある。問題の本質は、要素の移動にはたしかに話し手の何らかの気持ちの持ち方・心的態度が表明されていること、話し手がいちばん伝えたいことはどこにあるか、ということ、そして、一度心的態度を表明したところには、あらたな心的態度の表明はできない、ということにかかわるのである。「主張部分に RT がおこりうる」は、「話し手がいちばん伝えたいと思っているところに、移動による心的態度の表明ができる」といいかえることができる。こうすると、MCP は、

27.a *Who dashed into the room?*

b **Who into the room dashed?* (=18.a) (疑問/方向副詞前置)

- c * *Undeniably*, he *may* be there with her. (強い蓋然性の法副詞/弱い蓋然性の法助動詞)
- d * *May come* tommorow. (法助動詞/命令)
- e? * *Dave quietly may* leave the room. (様態副詞前置/蓋然性の法助動詞)

27.aの心的態度が一度表明された文は許容されるが、27.b, c, d, eのように、それぞれが、二つの異なった心的態度の表現をもつため非文となるのとまったく同様に、より一般的な立場からとらえることができる。RTは、たしかに「心的態度の一貫性」の問題なのである。

Notes

- * 筆者は、葛西(1981:94)において、「発話全体としてみたとき「ルート変形」も「話者の態度の一貫性」の仮定の例外ではありえない」とのべた。その後、葛西(1992b:994)においてもこのことにふれた。本稿は、「ルート変形」(RT)と「心的態度の一貫性」の関係を中心に論じたものである。
- (1) Emonds(1970)は、一番上のS(または、これに直接支配されるS)をルートSとし、そこにおこる語順の変更をルート変形(RT)とした。これは、基本的には、いわゆる主節におこるものであり、従属節にはおこらないことをしめしているの、以下これにしたがって議論をすることにする。「ルートS」に支配されるSは、「はめこみ文」、「補文」など呼び名はあるが、「従属節」とよんでおく。
- (2) しかし、人称・時制がかわると、この部分は独立命題となり、主張になってしまう。(安井 1979, 中右 1979, 1980)。
- (3) Bolinger(1978:122) 'double dislocation', Ogle(1981:121) 'no two such rules can apply in the same clause'
- (4) つぎの表現もおそらく趣旨においてはふかく関係しているであろう。
Erteschick-Shir(1977:2) 'Extraction can occur only out of clauses which can be considered dominant', Grosu(1983:112) 'Extraction is

permitted only from potentially Dominant position because these are the only positions that there are... The Dominant NP of some S in some context is that NP which expresses the "newest"...kind of information;'

(5) 葛西 (1981 : 96) 「「ルート変形」をうけていない文の陳述内容を前提とし、その一部を強調するに足ると話者が考えていることをあらかず述語、陳述内容に話者がコミットした態度をあらかず述語でなくてはならない」。また、福地 (1985 : 198) のつぎのことばも趣旨においては、同じものであろう。「語順の変更がおこる従属節では、単に断定されていると言うより、そこに現われる話者の心情が主節述語の意味特徴に合致していなければならないのが実情である」。

References

- Banfield, A. (1973) "Narrative style and the grammar of direct and indirect speech" *FL* 10: 1~39
- Bolinger, D. (1977) "Another glance at main clause phenomena" *EFL/ESL*. 511~519
 ——— (1979) *Form and Meaning* Longman
- Bowers, J. (1976) "On surface structure grammatical relations and structure preserving hypothesis" *LA* 2-3: 225~242
- Bresnan, J. W. (1970) "On complementizers" *FL* 6: 297~321
- Cattel, R. (1978) "On the source of interrogative adverbs" *Lg.* 54:61~77
- Chvany, C. V. (1973) "Notes on "Root" and "Structure preserving" in Russia" *You Take the High Node and I Take the Low Node*. 252~290
- Davison, A. (1970) "Casual adverbs and performative verbs" *CLS* 6: 190~201
- Emonds, J. (1970) *Root and Structure-preserving Transformations* Doc. Diss.
 ——— (1978) "On root-transformation and the structure preserving hypothesis" *LA* 4-4: 321~364
- Erteschick-Shir, N. (1977) *On the Nature of Island Constraints* Indiana Univ. Press
 ——— (1987) "Dominance and modularity" *Linguistics* 25: 671~685
 ——— /Lappin, S. (1979) "Dominance and functional explanation of island phenomena" *Theoretical Linguistics* 6: 41~86
- 福地肇 (1985) 『談話の構造』大修館
- Goldsmith, J. (1978) "Complementizers and the status of root sentences" *NELS* 8: 86~96

- (1981) "Complementizers and root sentences" *LI* 12-4: 541~574
- Green, G. M. (1974) "The function of form and the form of function" *CLS* 10: 186~197
- (1976) "Main clause phenomena in subordinate clauses" *Lg.* 52-2: 382~397
- Grice, H. P. (1975) "Logic and conversation" *Syntax and Semantics* 3 Academic Press
- Grimshaw, J. (1979) "The structure-preserving constraint: A review of *A Transformational Approach to English Syntax* by J. E.monds" *LA* 5-3: 313~343
- Grosu, A. (1982) "The stragrammatical content of certain "island constraints"" *Theoretical Linguistics* 9-1: 17~67
- (1983) "Topicality versus dominance" *Theoretical Linguistics* 10: 97~113
- Guéron, (1980) "On the syntax and semantics of PP extraposition" *LI* 11-4: 637~678
- Higgins, F. R. (1973) "On J. Emonds's analysis of extraposition" *Syntax and Semantics* 2: 149~195
- Hooper, J. B. (1975) "On assertive predicates" *Syntax and Semantics* 4: 91~124
- /Thompson, S. (1973) "On the applicability of root transformation" *LI* 4: 465~497
- Huck, G. J./Na, Y. (1990) "Extraposition and focus" *Lg.* 66-1: 51~77
- Iwakura, K. (1978) "On root-transformati and the structure preserving hypothesis *LA* 4-4: 321~364
- James, D. (1972) "Some aspects of the syntax and semantics of interjection" *CLS* 8: 162~172
- 葛西清蔵(1981) " * Did Frank probalby beat all his opponents? の構造" 北大文学部紀要 30-1: 79~102
- (1992 a) 「いわゆる「指定主語条件」について」 函館英文学 31: 61~69
- (1992 b) 「心的態度の一貫性」 『英語青年』 139-4: 174
- (1994) 「心的態度の一貫性とその表現について」 北大文学部紀要 42-2: 81~109
- Koster, J. (1978) "Condition, empty nodes and markedness" *LI* 9-4: 551~593
- Ladusaw, W. A. (1978) "The scope of some sentence adverbs and surface structure" *NELS* 8: 97~110
- Lakoff, R. (1969) "Syntactic argument for negative transportation" *CLS* 5: 140~147
- Langendoen, T. (1973) "The problem of grammatical relations in surface structure" *Georgetown Round Table* 27~38
- (1979) "More on locative inversion sentences and the structure preserving hypothesis" *LA* 5-4: 421~437
- Lindholm, J. N. (1969) "Negative raising and sentence pronominalization" *CLS* 5: 148~158

- Lysvåg, P. (1975) "Verbs of hedging" *Syntax and Semantics* 4: 125~154
- McCawley, N. A. (1977) "What is the "emphatic root transformation"?" *CLS* 13: 384~400
- Nagahara, Y. (1973) "Critique of Emonds' structure preserving hypothesis" *Studies in English Linguistics* 2: 28~60
- 中島平三(1984) 『英語の移動現象研究』研究社出版
- 中右実(1979) 「モダリティと命題」『英語と日本語と』くろしほ出版
- (1980) 「文副詞の比較」『日英語比較講座・文法』国広編 大修館
- Newmeyer, F. J. (1987) "Presentational *there*-insertion and the notions "root transformation" and "stylistic rule"" *CLS* 23: 295~307
- Ogle, R. (1981) "Redefining the scope of root transformation" *Linguistics* 19: 119~146
- Ross, J. R. (1967) *Constraints on Variables in Syntax* Doc. Diss. MIT
- Subbaro, K. V. (1973) "On the anadequacy of the structure-preserving constraint with reference to extraposition" *CLS* 9: 639~651
- Woodford, E. (1976) "Topicalization and clefting without wh-movement" *NELS* 8: 220~230
- 安井泉(1979) 「主節の透明性と補文の文性」『英文学研究』56: 281~196
- Ziv, Y./Cole, P. (1976) "Relative extraposition and the scope of definite descriptions in Hebrew and English" *CLS* 10: 772~786